

Title	教養部改善問題資料集 まえがき
Author(s)	山口, 巖
Citation	ことばの構造とことばの論理 : 山口巖教授停年記念論文集 (1998): 760-757
Issue Date	1998-07
URL	http://hdl.handle.net/2433/65779
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

とみてもよいであろう。そして対者（二人称）はここでも絶対的個と他者＝普遍とを媒介するものとして立ちあらわれることになる。ヘーゲルやマルクスの弁証法の考えもまず *an sich* なものがあり、これに *für sich* なものが対立し、その相剋によってこれが質の異なる *an und für sich* なものに転化すると教える。自己に向うものとしての対自はこれと質の異なる即且向自への媒介者として立つ。

「三」とはこのようなものである。それは単に個物の三個の集合に過ぎぬといったものではない。このように卑近な例からも明らかのように、言語の現象は我々のものの考え方に深く関わっており、精神の深みにその根を下しているということができよう。それだけでなく言語の現象は、我々に未だ形式化されていない暗い意識の淵を時として垣間見せてくれる。触知可能な形式のみをとらえてこれを分解し、その機能を考察することだけが、必ずしも「科学的」なことではなく、言語に接する道でもない、と思えてならないのである。

やまぐち いわお ロシア語

「教養部改善問題資料集」1976年5月1日。

教養部改善問題資料集

まえがき

我々が若かったときは、「教養部はどうなるのか」という漠然とした空気を感じていましたが、今は、「教養部はどうあるようにすべきか」という切実な立場に変わってきているのを身にしみて痛感します。分校という名で誕生した我々の組織体は、その時点から既に一種の差別的な扱いに甘んじなければならなかった、謂わば学制改革の鬼子だったのでしょうか。遠い将来の見透しを考える余裕など持ち得なかった当時としては、或いは止むを得なかったのかも知れませんが、到底それでは教育百年の計は立てられなかったであります。分校は教養部という

名に変わりましたが、実体は依然として同じのまま現在に立ち到っています。三十年近くも前と本質的に変わらない状態で、今日的な教育・研究に堪えられる筈がないのは、誰の眼にも極めて明らかです。そのことは、多くの人達が指摘しておられるように、単に教養部だけの問題ではなく、全学的、さらには全国的な緊急を要する問題であります。その個々に立ち入ったことは、いろいろの場所で、幾多の人々が既に詳しく解説しておられるので、ここで改めて論じようとは思いませんが、我々が主張し、目指していることが、全学的な理解を必ずしも得ていないと思われまますので、日頃思っている点を二、三述べてみたいと思います。

先づ、大多数の学生達が教養部時代を一つの息抜きの場所のように心得ていること、それはひいては教養部時代と学部時代との間に大きな断層を生じていることを、我々は謙虚に反省してみる必要があります。それは、一般教育に対する学生達並びに我々自身の認識不足と同時に、我々の立場の曖昧さおよび力量の不足に対する学生達の過小評価に基くものでありましよう。その中で最も重要と思われる力量不足ということは、実質的なことを意味する場合も勿論ありますが、現在のように目まぐるしい情報化時代やビッグサイエンスの時代には、個の力ではどうにもならない場合が多いと思います。十分な環境、若い組織力、そしてすぐれた設備を与えられたとき、大ていの者は偉大な力を発揮するようになるものです。我々は発足のときから何とかしてそれを獲得しようと自力で努力を続けてきましたが、所詮出稽古みたいなことでは成果の限度は知れています。その結果をもって直ちに力量の不足と軽視されるのは平等ではないでしょう。出発点から既に我々は大きなハンディキャップを背負わされてきていることを御理解の上で、平等の条件を要求するのは単なるエゴイズムではないと思うのですがどうでしょうか。

次に、教養部独自の研究科ということの認識についてであります。これも学問の分化から総合へという趣旨が、これまで何度となく繰返し述べられているのでありますが、それはまだまだ単なる空理空論としか受け止められていないようです。しかし、実際に分化したものを総合できるならば、そのような役割としての我々の目指す独自の研究科の意義は誰しも疑うことはない筈です。我々は教授会

や教官部会、教官懇談会等で、文科系、理科系を問わず、いろいろな分野の人々と常に接し論じ理解し合っています。このこと自体、既存の学部研究所では到底考えられない現象でしょう。今日やかましく言われている学際的研究というものには先づこのような貴重な土壌の中から生まれるべきものではないでしょうか。かつて、ポール・ヴァレリイは、十年間その道とする詩を捨てて数学に打ち込んだといわれます。数学的厳密性に裏うちされたそれ以後の彼の詩に対する評価は周知の通りです。数学論的詩学というようなものがあるとすれば、それは正しくこの教養部でしか出来ない分野ではないでしょうか。夢をさらに広げれば、新しい物理学もまたピカソの絵からヒントが得られないとも限りません。夢は単なる夢物語に終わってはなりません、我々はそれ程に学際というものの領域を広く豊かに考えることも時には必要ではないかと考えています。このように文科系と理科系とを包含したような新しい学際領域をも、この際実験してみるだけの度量を持って欲しいと思います。文科系、理科系の人々が膝つき合わせて話し合い、互いに親密の度合を深めてゆくと、それは単なる空想ではないという気が実感として湧いてくるものです。極度に分化し固定化しかけたと思われる既存の研究分野に、新風を送りこむ現実的な試みとしての意義が、そこには十分あると自負さへしているのです。このような土壌としての教養部の実体は、経験なしに話を聞かされるだけでは、恐らく既存学部や研究所の人達は十分認識されていないと思います。だからこそ事あるごとに、口を酸っぱくして我々の先輩達は訴え続けてきたし、現に我々もまたそれを引き継いでいるのです。

余り細かいことはこれ以上は差し控えますが、我々の考察なり指向の中には勿論認識不足や思い上がりもあろうかと思しますので、その点は謙虚に御指摘を仰ぐとしまして、とに角、中間的な若い層を断ち切られ、しかも多数の学生達と不十分な環境、設備の中では避けられない沈滞のもたらす全学的な弊害と、それに対する全学的な解決に暖い御理解と御援助を仰ぐ次第であります。

尚、御参考までに我々の用意しました資料を後に添えておきますので、御覧頂ければ幸いです。

1976年5月1日 京都大学職員組合教養部支部長